

尾張地域における近世綿作の地域的特色

岩 崎 公 弥

- I. はじめに
- II. 資料と分析方法
- III. 明治期の綿作状況からみた予察的考察
- IV. 近世における綿作の状況
 - (1) 『尾張徇行記』にみる綿作状況
 - (2) 「田面帳」による綿作率の分布
 - (3) 中島郡起村・小信中島村の事例
 - (4) 春日井郡野崎村の事例
 - (5) 丹羽郡西大海道村の事例
- V. 尾張綿作の諸側面と綿織物製品の分化
 - (1) 綿栽培体系と綿作立地
 - (2) 綿作の経営規模とその生産性
 - (3) 綿生産の変動とその社会的背景
 - (4) 綿生産と肥料価格の動向
 - (5) 明治初期の綿織物製品分化の地域的特色
- VI. 結 語

I. はじめに

近世の綿作は、全国的には適地適作化の進展により、西日本を中心として綿作地帯が形成されていった。しかし、それらはそれぞれの地域の置かれた諸条件の中で、多様な存在形態を生み出していると思われる。だが、筆者が西三河地域の綿作研究においても指摘したように、畿内以外の綿作地帯の研究はそれほど多くはない。また、綿作に言及する研究はあるにしても、その観点や取り上げ方は多様である¹⁾。そこで筆者は、わが国の近世綿作に関する体系的研究において、地域的比較を通して各地の綿作の特色を究明し、かつ封建的農業の時代にあつて、各地の農民的商品生産の発展の一面を、綿作の研究

を通して把握できるのではないかと考える。本稿はそうした観点に立つての事例研究として位置づけられるものである。

綿作は関東以西の温暖地において全般的にみられたが、ここで扱う綿作地帯とは、商品生産として行われ、かつ当該地域の農業部門において相当の比重、すなわち、商品作物の筆頭をなしているような地域を考えている。したがって、まずどういった地域がそれに当たるのかを吟味する必要がある。そのためには、綿作の占める農業上の地位を見ることによって、ある程度それを知ることができると思われる。同時に、綿作地帯となった自然的・社会的優位性は何であったかをも、考察しなければならない。その地域における綿作の起源という問題も重要ではあるが、多くの場合、起源に関しては史料制約があり、解明は難しい。ただ、起源が古いことと綿作の先進性や隆盛は必ずしも直結しない。おおむねわが国内での木綿栽培の開始は、15世紀末から16世紀初期にかけての、戦国時代後半頃と考えられている²⁾。尾西地域についてその起源は不明であるが、隣国三河や伊勢、および知多地方における綿栽培の導入状況³⁾などから判断して、16世紀中頃にはある程度栽培がみられたのではないかと想像される。

さて今日わが国を代表する繊維工業地域である尾西機業地の起源は、周知のごとく江戸時代における当地の綿作を基盤としたものであった。また尾張地域のうち、知多地域も重要な機業地として成長しており「知多木綿」として知られていた。このような尾張の綿業に関する研究は豊富であり、当地域は塩沢・川浦、中村、林な

どを初めとする経済史学の分野においてかつて活発な論争の舞台となった地域でもある⁴⁾。しかしこれらの分野で問題とされるのは、主として地主制研究との関わりで、当地域の綿織物業の生産様式と、それを基とするブルジョア的発展の評価をめぐる点にあったといえよう。当地域の綿業が、地元の綿生産に基盤を置いていたことを考慮するならば、綿作の状況や実態についても究明されるべき点が多いように思われる。

尾西地域における綿織物業の高度の発展ゆえに、当地域の研究の中心的関心が綿織物業の生産形態をめぐる経済史的评价に置かれたことは、容易に推察される。また、従来このような綿織物業の発展の基礎として、尾西綿作地域の存在はある程度自明の、あるいは与件的なものと考えられてきた感もある。確かに、綿作と綿織物業とは、本来不可分に結びついていたと考えられる。同一地域の中で、綿作という農業部門と、綿織物業という工業部門が併存していた訳であるから、労働力の面から、両者は密接な関連を持っていたのではないかと考えられる。しかし、綿織物業の高度な発展を以て、ただちに綿作の先進的状況に結びつけることには、注意が必要である。そこで本稿では、尾張とくに尾西地域の綿作の実態を究明することに主眼を置き、同時に、綿織物業の動向と絡めて、綿作の動向を考察したい。また、考察の対象とする時期は江戸時代後半から明治20年頃までとする⁵⁾。

II. 資料と分析方法

綿作の地域的分布を明らかにする場合、統一的な資料が得られることが望ましい。明治以降のものについては、明治9年から数年次にわたる『全国農産表』⁶⁾によって、ある程度、郡別の綿生産状況を知ることができる。広域的・統一的資料の得にくい、近世の綿生産状況を把握する前提として、まず明治期の統計を利用することから始めた。

近世においては統一的資料が少なく、綿生産の全体的状況はつかみ難いが、地誌的資料とし

て、尾張では従来『尾張徇行記』⁷⁾が用いられてきた。同書は、藩経済再建のための基礎資料とすべく、18世紀末から19世紀初期にかけて尾張藩士樋口好古によって編纂された、尾張藩のいわば村別地誌であって、『郡村徇行記』とも呼ばれている。同書のうち、葉栗郡全域と中島郡および知多郡の一部が欠本となっているが、1800年前後の尾張の村々の事情を知るには、最も優れた資料の一つである。『尾張徇行記』には、綿栽培に関する記事がみられる。これらの記事の見られる村々を地図上に落とし、当時の綿作の分布状況を知ることが可能である。しかし、それだけでは地域毎の綿栽培の程度、すなわち生産の規模や時代的变化を知ることにはできない。

そこで本論では、各村別の綿作状況を知ることのできる資料として、『田面帳』と呼ばれる資料も用いた。この資料は、『田畑植付物書上帳』とか『田畑御案内帳』などとも呼ばれるように、藩が免(税)率を決めるための検見に際し、農作物の作付け実態を予め把握するために各村に提出させたと考えられる帳簿である。同資料には、村石高、田畑面積、課税対象からの除外地の高・面積の他、村によっては、水田での稲の種類(早・中・晩稲など)別作付面積が記されることがある。畑については、作物別にその作付面積が記されている。ただし、これらの作物はすべて夏作物についての報告である。さらに、最後に過去10カ年分の免率が列記されている。

この書類は、各村の庄屋名で、尾張各地の地方支配を行った各陣屋に提出されている。畑作物について、作物別の作付面積が判明するというのは、各村々の農業の特色を知るのに好都合である。これが収穫高ではないところに、より一層の価値がある。綿についていえば、綿は気象状況にその豊凶が著しく左右されやすく、生産量の変動でもってしては、綿作の盛衰の傾向をとらえることが難しいからである。また、作付面積で示されているので、綿が全畑作地の中で占める比重の大きさを見ることもできる。本稿では、この『田面帳』に記された綿作付面積を基に、畑地での綿作率を求め、畑作地に占め

る綿栽培面積の割合を算出したものを主に用いて、それを図化した。

以上、『全国農産表』『尾張徇行記』『田面帳』という3つの資料を基に、綿の地域的分布状況を押さえることが可能である。さらに、資料の得られる村については、綿生産の年次的変化を探るとともに、個別資料によって綿作農民別の綿の生産規模や生産性を明らかにしていきたい。

Ⅲ. 明治期の綿作状況からみた予察的考察

尾張には、江戸期において、全藩的に同一時点の綿作状況を統計の形で知りうる資料はない。そこで先に述べた『全国農産表』を基に、明治期における綿作状況をまず復原して、近世の綿作状況を知る手がかりとしたい。

表1は、明治初期における郡別の綿作状況を示している。尾張全体では、明治初期における全実綿産額は500～600万斤であり、これは当時の国別産額では、河内・三河・摂津に次いで第4番目に位置していた。郡別にみると、年により変動はあるものの、中島郡の生産額の大きさが目をひく。また、愛知・春日井の両郡の生産も大きく、これら3郡で尾張全体の60%以上を生産している。もう一つ目をひくのが、知多郡の生産の着実な伸びである。他作物との関係でみると、『全国農産表』の特有農産物のなかでは、明治9～11(1876～78)年を平均した場合、

表1 明治前期における尾張諸郡の実綿生産量とその郡別割合

郡名	明治9年	明治10年	明治11年	明治12年
	千斤(%)	千斤(%)	千斤(%)	千斤(%)
愛知	978(15)	1,101(21)	1,199(24)	1,173(18)
春日井	938(15)	1,158(23)	856(17)	647(10)
丹羽	757(12)	528(10)	693(14)	762(11)
葉栗	390(6)	125(2)	158(3)	161(2)
中島	2,360(38)	1,205(23)	991(20)	2,547(38)
海東	351(6)	463(9)	375(7)	348(5)
海西	151(2)	257(5)	122(2)	127(2)
知多	257(4)	298(6)	683(13)	900(14)
計	6,182	5,135	5,077	6,665

(明治9～12年『全国農産表』より作成)

表2 明治17年における郡別の綿作比率

郡名	綿生産額 (a)	綿作面積 (b)	畑作地 面積 (c)	綿反収 (a/b)	綿作率 (b/c)
	千貫(%)	町(%)	町	貫/反	%
愛知	255(22)	1,304(23)	4,354	19.6	29.9
春日井	207(18)	1,193(21)	5,018	17.4	23.8
丹羽	197(17)	733(13)	4,307	26.9	17.0
葉栗	39(3)	191(3)	1,381	20.4	13.8
中島	244(21)	1,065(19)	4,345	22.9	24.5
海東	89(8)	402(7)	1,982	22.1	20.3
海西	24(2)	263(5)	1,109	9.1	23.7
知多	99(9)	509(9)	5,061	19.4	10.1
計	1,154	5,660	27,557	20.4	20.5

(農商務統計表より作成)

海西郡を除いたすべての郡で、実綿の生産額が最も大きい。実綿に次ぐ生産額を持つのは、愛知郡・春日井郡・海東郡・知多郡では菜種であり、丹羽郡・中島郡では藍葉である。ちなみに、葉栗郡の第2位の特有農産は繭、海西郡は第1位が藍葉で、第2位が実綿であった。

表2は、時代が下るが、明治17(1884)年時点における綿作状況を示している。依然として愛知・中島・春日井3郡で全体の60%以上を占めているが、これらの郡では、畑地での綿作率が他郡よりも相対的に高かった。しかし反収の点では、低湿地域帯である海西郡を別とすれば、それほど差はない。当時においては、耕作条件が変わらなければ、生産性もあまり変わらなかったのではなかろうか。つまり、綿作技術という点においては、それほど地域差がなくなっていたのではないかと思われる。ただし、これはある一定の地域的広がりを持った地域での平均であって、個々のレベルでみた場合には、その生産性にはかなりの差があったことは注意しなければならない。

表1および表2でみるかぎり、地域別の生産比の割合は同じ傾向を示していることから、この状況を江戸期にまで延長することは、ある程度妥当と言えよう。ただし、明治期の綿の反収や綿作率をもって江戸期のそれに当てはめることには、留保が必要であろう。

表3 「尾張徇行記」にみられる綿作・綿業関係記事一覧

郡	村 名	綿作及び綿業に関する記事 (抜粋)	郡	村 名	綿作及び綿業に関する記事 (抜粋)
愛知	傍示本	此村アタリハ堅硬ノ地ニテ、土糞ニハ綿粕干鰯ヲ用ヒ、又灰ヲ専ラ用ヒ来レリ、木綿ナトハヨク実レリ	木ノ山	農隙ニハ有松紋リノ豊後トテ、木綿ヲ初秩父縮緬ナトノ紋リヲククルコトヲ男女共ニ産トス。(中略)畑ハ生綿テキアシシ、奥大豆ヲ専ラツクルトナリ	
	鳴海	有松紋木綿ヲヒサキ、細民ノ婦女ハ絞木綿ククル事ヲ生産トス		富田	畠ハ石交リ又マツチモアリ、麦小物木綿蕎麦菜大根ヲツクレリ、大豆ハ実リヨキ故多ク作レリ
春日井	鹿田	畑多キ所故ニ田麦ハ不時、畠物麦作ハ実リヨシ、木綿ハ地ニアハズ、此村ハ平衍ニシテ土ハマツチ勝ナル所ナリ、田ハ晩稻多シ、畠物ハ麦ハ一面作り、ソレニツツキ粟黍稗唐黍大豆小豆ヲ作り、其外木綿ヲ多ク作レリ、	桶狭間	婦女ハ農隙ニ有松紋木綿ノククシヲ生産ノ助トス(中略)畑毛ハ麦小物ノ外木綿煙草大豆類大概実リヨシ	
	清須	此村ハ平衍ニシテ土ハマツチ勝ナル所ナリ、田ハ晩稻多シ、畠物ハ麦ハ一面作り、ソレニツツキ粟黍稗唐黍大豆小豆ヲ作り、其外木綿ヲ多ク作レリ、		有松村新田	里民絞木綿ヲ仕出シ旅客へ販キ生産トス(中略)婦女ハ当村ハ勿論近村マテモ絞木綿ノ下地ククリヲシテ年内生産ノ助トス
井	土器野新田	枇杷島村辺油絞りノ綿実挽ナトニ出、畑土高ミハ赤土卑ミハマツチニテ、総体作物ヨク木綿大豆ナトモ五分通りツツモ作レルト也	猪伏	盆大豆奥大豆半分ツツ作り木綿モ少シツツ作ルトナリ、田ニハ専ラ灰ヲ用ヒ山草藻草モ用ヒズト也	
	西尾	総体作物ヨク木綿大豆ナトモ五分通りツツモ作レルト也		卯之山	畠毛ハ麦小物大根蕎麦ナトヲ作レリ、木綿大豆ハ土地ニアハズ少シ作レリ、土糞ニハ灰干鰯ヲ専ラツカヒ山草モ培ヒスルナリ
森本	九日市場	綿綿ヲ少シツツ製シテ他方へ売ス者アリ	福住	小商ヒスル者モ交リテ木綿ノ中買ナトスル者モアリ(中略)畠ハ皆山畑ナリ、麦小物其外盆大豆ヲ多ク作レリ、木綿ハエミアシシ、土糞ハ此アタリモ灰ヲ専ラツカヒ干鰯ハ少シツツ用ユ、種粕ハ土地ニ遇ハザル由、有脇村ニ灰間屋アリ是ヲ津灰トイヘル	
	南小淵	畑多キ所ナレトモ麦木綿ヲ専ラ作り土地ハマツチ砂交リ也、畑毛ニ木綿ハヨク出来ル所ナリ		板山	畠ハ皆山畑也、麦小物盆大豆ヲ多ク作り実リ大概ヨロシ、木綿ハ地ニアハズエミアシシ、土ハマツチニ砂交リノ所ナリ、マツチハ薄地ナル所ナリ
丹羽	柚木下風	木綿ヲクリ粉ニシ、他方へ出セリ	知多	切山	一体畠多ナル所ニテ麦稗粟ノ類其外盆大豆ヲ専作レリ、木綿ハスヘテエミアシ、此アタリニテハ山草ヲ以テ土糞トス
	定水寺	農事ノ余力ニクリ綿ヲ婦女業トシ、一宮村へ売ス者モアリ		常滑	畑ハ麦小物ノ外木綿ハ少シ作り大豆ヲ多ク作レリ
島宮	宮後	畠毛ノミノ所ニテ荏大豆木綿ヲ専ラニ作レリ	樽水	畠毛ハ麦小物ノ外ニ木綿ハ少シ作り大豆ヲ多ク作レリ	
	下野	農業ノ余力ニハ菅大臣縞ヲ織出シ生産ノ援ケトスル者アリ		西阿	畠毛ハ麦小物ノ外大豆ヲ多ク作レリ、木綿ハ土地ニアハズ少シ作レリ(中略)此アタリ藻草ハ土糞ニ用ヒテモ十分ナラズ、日永崎ヨリ北ノ方藻草ヲ土糞ニシテヨロシトナリ
子生和	陸田	農業ノ余力ニ綿綿ヲ商フ者二三戸アリ	苅屋	木綿大豆ノ類ハ実リアシシ	
	次郎丸	其余力ニ綿綿ヲ商ヒ一ノ宮へ出ス者二戸アリ		北奥田	木綿ハ元ヨリ土地ニアハズ大豆ヲ多ク作レリ
小池正明寺	稲葉	綿綿ノ仲買ヲシ市ノ宮へ交易セリ	南奥田	畠毛ハ麦小物木綿蕎麦菜大根ヲ作レリ	
	於保	農業ノ余力ニクリ綿商ヲスル者二戸アリ		岡部	畠毛ハ麦小物木綿蕎麦菜大根ヲ専作レリ、大豆ハテキズ、畠ハ村西ヘツキ皆砂地ナリ
中島	北高井	商賈ハ処々ニヨリ木綿ヲ買出シ、名古屋木綿問屋又ハ下小田井枇杷島アタリ仲買へ送りツカハセリ	久	畠ハ山マツチ赤土ニ砂礫ハナシ、(中略)畠毛ハ麦稗粟類ヲ多ク作り、木綿ハエミアシ、大豆モ多ク不作トナリ	
	南高井	農事ノ余力ニクリ綿商ヲスル者二戸アリ		名切	畠毛ノ内木綿ハコノアタリモミアシ、大豆ハ相応ニ実レリ
林野	妙興寺	其余力ニ木綿ノ仲買ヲスル商家三戸アリ、又クリ綿ヲモシーノ宮へウリ出ストナリ	久	畠毛ハ麦小物大豆ヲ作り、木綿胡麻類ハ少シ作レリ、木綿ハエミアシ、其外甘藷ヲ二町ホト作レリ	
	妙興寺	其余力ニ木綿買又ハ綿綿商ヒラスル者アリ			
海東	新居屋	総体膏腴ノ地ナリ、木綿ナトハ上田スキテ出来アシシト也			
	中橋	畑ハシケ地故ニ木綿ハアシシ、アカマツチ也			

(「尾張徇行記」より作成)

IV. 近世における綿作の状況

(1) 『尾張徇行記』にみる綿作状況

優れた近世の地誌とも言えるこの『尾張徇行記』には、各村別の特産や農産物の生産状況が記されていて興味深い。その中から綿作や綿業に関する記事を拾いだしたものが、表3である。現存する、同書の記載する村が916カ村あまりあるなかで、綿作や綿業に関する記事を持つ村は45カ村あまりにすぎない。それは比率にして、全体の5%にも満たない。さらに、綿作や綿業関係の記事を持つ村々のうち、「明らかに綿生産を行なっている」または「綿が盛んに栽培されている」という意味の記事を持つ村となると、10カ村に満たなくなる。

これは、当時有数の綿産地であった尾張地域の状況を、十分に反映した数字とは言えない。それはむしろ、綿生産が当地方では一般的すぎて、特筆すべき事柄ではなかったと解釈することができる。知多郡の村々の記事によくみられる「木綿ハアシシ」とか「木綿ハ地ニアワズ、エミアシシ」といった表現は、むしろこういった状況が特殊であったことを物語っているように思われる。ただし、前述の通り『尾張徇行記』は、葉栗郡全郡と中島および知多両郡の、一部地域の巻が未発見となっており、本来最も綿作の盛んであったと考えられる地域が欠けていることは、非常に残念である。もしそれらの巻があれば、綿作や綿業に関する記事がもっと多くなっていたかも知れない。

表3の記事の内容に目を移すと、畑がちであるから綿を多く作っている旨の記載もいくつか見られる（例えば、丹羽郡の九日市場村、南小淵村、島宮村など）。一方、中島郡辺りでは、綿作の記事よりも、農間余業に木綿の仲買や繰綿商をする者がいるといった、綿商売に関する記事がほとんどである。それは、当時この地域が綿作の中心地帯であって、それを背景として繰綿生産業や綿織物業が発達していたことを物語っている。また、一宮が名古屋とともに綿取引の重要な中心地であったこともわかる。

(2) 「田面帳」による綿作率の分布

先の明治期の資料の分析から、江戸期においても中島・愛知・春日井郡などの地域において、綿作が盛んであったことが推測されたが、ここでは実際に江戸期の資料により、その推測を補強したい。「田面帳」の畑の耕地利用に着目して、その中の綿作面積と畑地面積から、残存史料のうち、最も綿作面積が大きかった年について、畑地における綿作率を求め、それを図化したものが図1である。

この図から、畑地での綿作率が60%を越える村は、いずれも中島郡においてのみ認められる。それらの村名と綿作率を列举すれば、起村（本田分72%）、野田村（71%）、井堀村（70%）、小信^{おこし}中島村（69%）、長野村（62%）である。起村は、新田分を含めて計算すると、全村の綿作率が40%程度となる。しかし、本田分についてのみみるならば、その綿作率は72%と驚くべき綿作率の高さである。中島郡の諸村におけるこのような高率な綿作率を示す地域的背景は何であろうか。

自然的な面から言えば、図2に示したように、中島郡の全域が自然堤防の卓越した地域であるという点である。畑作地としての優れた条件を備えた地域であったと言えよう。また同時に、当地域における綿織物業の存在と、多様な農村商工業の発達に支えられた、一宮の三八市を中心とする市場圏の発展が考えられる。中島郡から海東郡へ移行する辺りにも、綿作率の低い村と綿作率が40%を越える村が混在した地域がみられる。この付近は地形的に、自然堤防卓越地帯と三角州性低地帯との境界に当たっている。

知多半島に入ると、総じてその綿作率は40%以下となり、「知多木綿」の名から連想されるほどには、原料としての綿の生産は盛んではなかったのではないかと推測される。『尾張徇行記』によってみた場合、おおむね知多半島の水田率は70~80%近くと高く、畑地は少なかったと考えられる。明治初期の統計でも、知多郡の実綿生産量はそれほど多くはない。

以上のことから近世、特に後期について言え

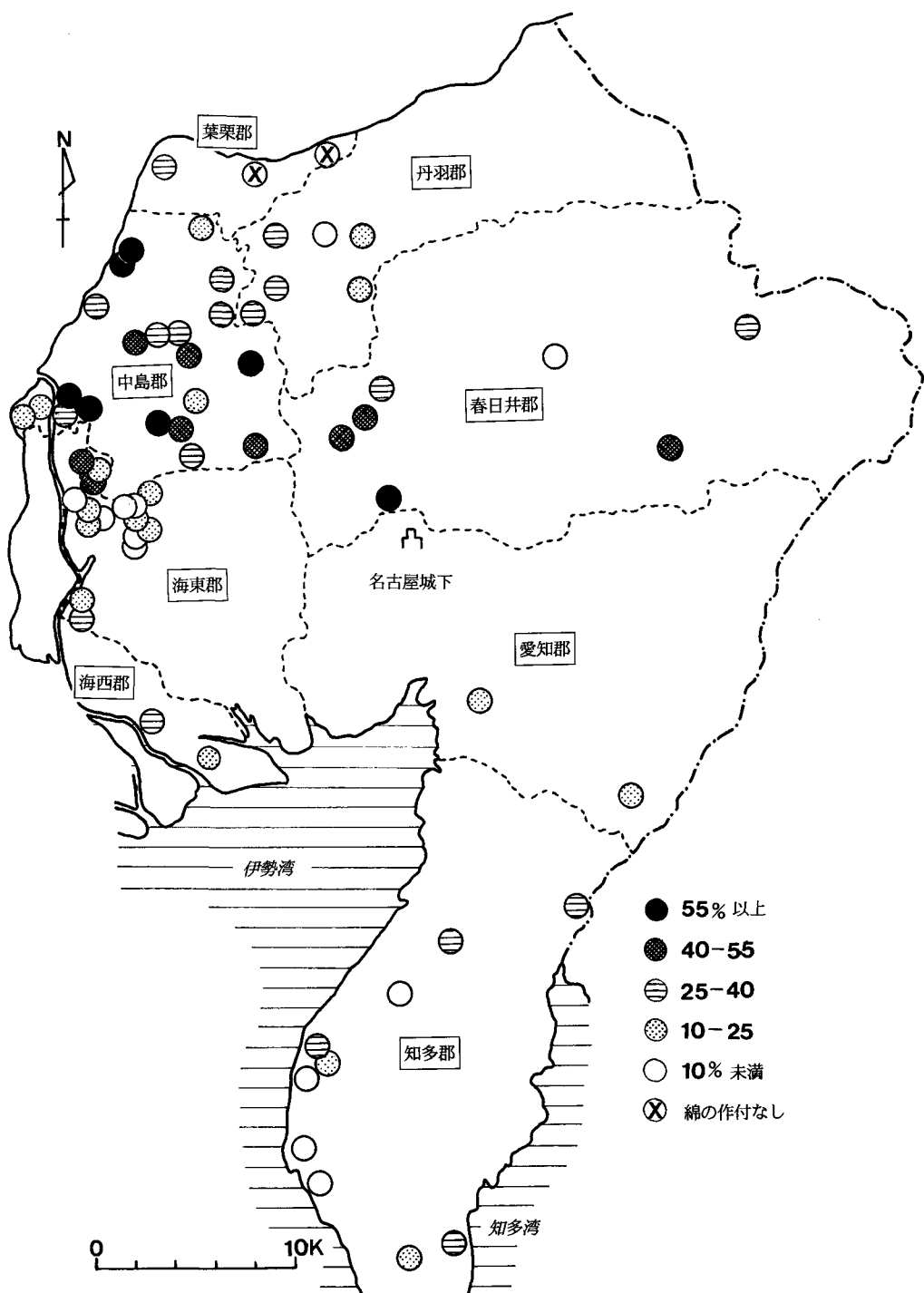


図1 19世紀前半頃における畑地での綿作率
(各村に残る「田面帳」より作成)

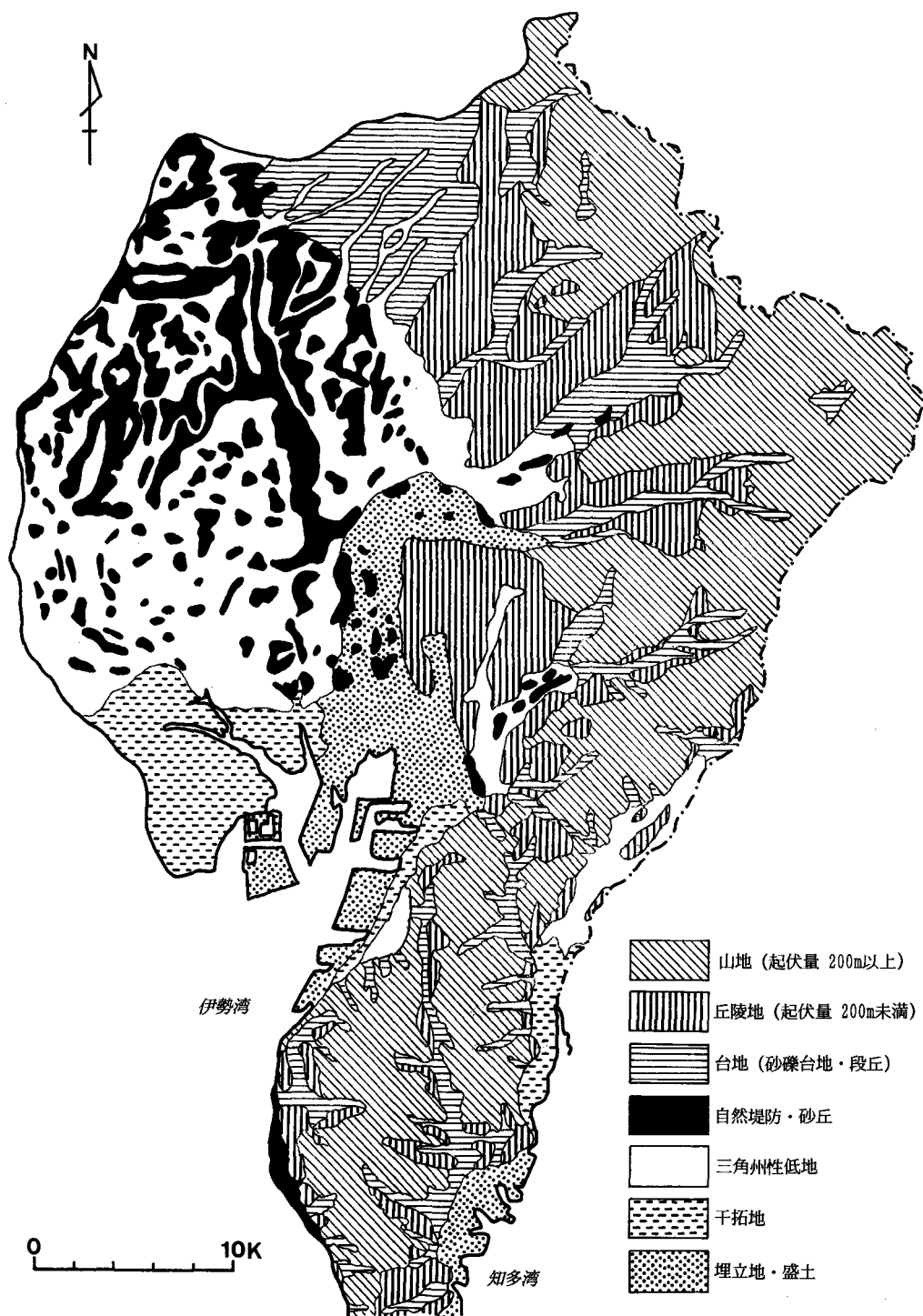


図2 尾張地域の地形分類
(経済企画庁総合開発局「土地分類図(愛知県)」1974, より作成)

ば、尾張の綿作中心地は、自然堤防卓越地である中島郡付近であったと考えられる。次に、史料の得られる村の綿作について、個別事例を分析する。

(3) 中島郡^{おこし}起村・小信^{このぶなかしま}中島村の事例

城下町名古屋に隣接する東海道宮宿と、中山道垂井宿とを結ぶ脇街道が、美濃街道である。起村は、この美濃街道が木曽川と交差する地点に設けられた、起宿を擁する村である。『寛文村々覚書』⁹⁾によれば、起村は田3町余、畑20町余、小信中島村は田10町余、畑26町余（いずれも本田面積）の、畑がちの村であった。起宿は、旅籠屋の数では美濃街道中最大の規模を持つ宿であったが、小村のため、周辺の富田村・西五城村・東五城村・小信中島村などが加宿とされ、これらは起五カ村と呼ばれていた。したがって、起村も小信中島村も陸上交通の要衝に位置する村であった。

特に起村は、表4に示すように江戸後期においては、しだいに戸数が増加し、かつ無高層の

割合が高くなってきていることがうかがえる。また人口の面では、1850年頃を境にして異なった傾向がみられる。1850年以前においては、女子数が男子数を上回っていたが、1850年以降はそれが逆転している。また、1850年以前においては男子の入奉公人数が減少傾向にあったが、女子のそれは増加傾向にあった。入奉公人の女子の多くは「作奉公並織屋奉公等」に來た者であった⁹⁾。尾張藩では、天保13(1842)年から嘉永6(1853)年にかけて、国産会所を設けて木綿など領内物産の流通統制を行なったが、近国への自由な移出禁止に対して、農民側は生産減少で対抗したため、天保15(1844)年にこの近国への輸出禁止を解除せざるをえなかった¹⁰⁾。1850年頃以降、全体として、人口は微減傾向にあるが、それは女子人口の減少によるものであることがわかる。したがって、1850年頃を境とする、女子人口や入奉公人数の動態は、このような木綿生産との関わりが推測されるのである。

また、幕末期から明治初期にかけての「内機中心の経営から出機中心経営への推転」¹¹⁾による

表4 近世後期における起村の戸数変化

年次	家数(戸, %)			人口(人)			入奉公人(人)		
	高持(%)	無高(%)	計	男	女	計	男	女	計
1672			102	283	295	578			
1693			147	368	363	731			
1793			205			1,034			
1810	134(60)	91(40)	225	459	578	1,037	70	43	113
1822	135(60)	91(40)	226	487	515	1,002	47	59	106
1828	136(58)	97(42)	233	520	544	1,064	32	138	170
1834	144(60)	96(40)	240	555	582	1,137	31	86	117
1841			230	515	518	1,033			
1846	135(52)	126(48)	261	600	773	1,373	25	202	227
1850	139(51)	136(49)	275	613	599	1,220			
1852	137(48)	149(52)	286	642	663	1,305	51	141	192
1858	133(46)	160(54)	292	636	615	1,251	95	226	321
1864	127(46)	150(54)	277	624	606	1,230	70	141	211
1867			274			1,171			
1869			277	586	567	1,153			
1879			375			1,352			

(『尾西市史資料編』『共武政表』より作成)

女子人口の減少の可能性も考えられる。また、当地域の出機子一桁に対する為替金¹²⁾が、他地域の倍近いものであったことは、当地域の綿織物業の比重の大きさを物語っている。19世紀における当地域の木綿織物生産のありかたは、先学の論争の焦点でもあったが、ここではこの点について立ち入ることを避け、綿作に焦点をあてて考察を進めたい。

表5および表6は、起村と小信中島村における綿作面積と綿作率の変化を示したものである。起村の本田については、綿作付面積の変動が激しい。起村には享保16(1731)年に六斎市が開かれ、市場的集落となっていたため、当村の綿作もそれに機敏に対応していったものと想像される。さらに、比較的短期間におけるこのような変動から、かなり投機的な綿作であったことが推測される。

小信中島村の場合は、18世紀から19世紀にか
表5 尾張国中島郡起村における綿作面積と綿作率の変化

	本 畑	古川新田	加納新田	加納新田 見 取
	畝(%)	畝(%)	畝(%)	畝(%)
1825	450(27.4)	10(45.4)		
1850	1184(72.2)	14(63.6)		
1860	490(29.9)	10(45.4)	120(11.7)	
1865	790(48.2)	10(45.0)	150(14.6)	20(7.6)
1868	930(56.7)	11(50.0)		50(19.0)

注) カッコ内は畑地における綿作率
 (『尾西市史資料編3』および『起町史』より作成)

表6 尾張国中島郡小信中島村における綿作面積と綿作率の変化

年次	本 田	備前新田	山方古川 新 田	寅 新 田
	畝(%)	畝(%)	畝(%)	畝(%)
1772	580(50.2)	140(42.2)	220(47.8)	27(38.6)
1815	1,618(66.9)	669(68.5)	607(72.9)	41(58.6)
1825	1,629(67.3)	670(68.6)	608(73.0)	41(58.6)
1828	1,644(68.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
1836	1,718(71.0)	681(69.8)	618(74.2)	42(60.0)
1837	1,530(63.2)	600(61.5)	550(66.0)	0(0.0)
1838	1,550(64.0)	600(61.5)	580(69.9)	0(0.0)

注) カッコ内は畑地における綿作率
 (『起町史』より作成)

けて綿作率が上昇しており、19世紀以降はほとんどの部分で、常に60%以上の綿作率を維持している。当村の場合には、本田・新田に関わらず高い綿作率を示しており、その差はほとんどないと言えよう。天保4(1833)年の凶作に際して提出された文書によれば、起村周辺5カ村では「就中綿作の儀ハ寔ニ以皆無同様の作方ニ相成迷惑至極奉存候、畑方御年貢御役銀下用ニ至迄綿作計を以相勤候儀ニ御座候処」¹³⁾といった状況の中で、綿不作のため検見を実施してほしい旨を嘆願している。

(4) 春日井郡野崎村の事例

名古屋城下町の北西約5 kmに位置する春日井郡に属する野崎村は、18世紀末の戸数がわずか12戸、人口74人、田4町6反、畑5町9反という小さな村であった。村は自然堤防卓越地帯に位置している。本村の綿作状況をみたのが表7である。綿作面積は2町5反から1町2反までと、年により開きがあるが、おおむね2町から2町5反程度の綿作を行っていた。畑地での綿作率は、高い時で約48%、低い時で約23%であった。1820年から幕末期にかけて、綿作面
表7 尾張国春日井郡野崎村における綿作面積と綿作率の変化

年 次	綿作面積	畑地での綿作率
	畝	%
1820	250	45.3
1821	237	44.5
1822	230	43.3
1823	230	43.3
1831	121	22.8
1832	231	43.5
1834	201	37.9
1841	121	22.8
1848	255	47.9
1851	255	47.9
1860	250	47.0
1861	210	39.5
1868	250	47.0
1869	210	39.5

(『西春町史』より作成)

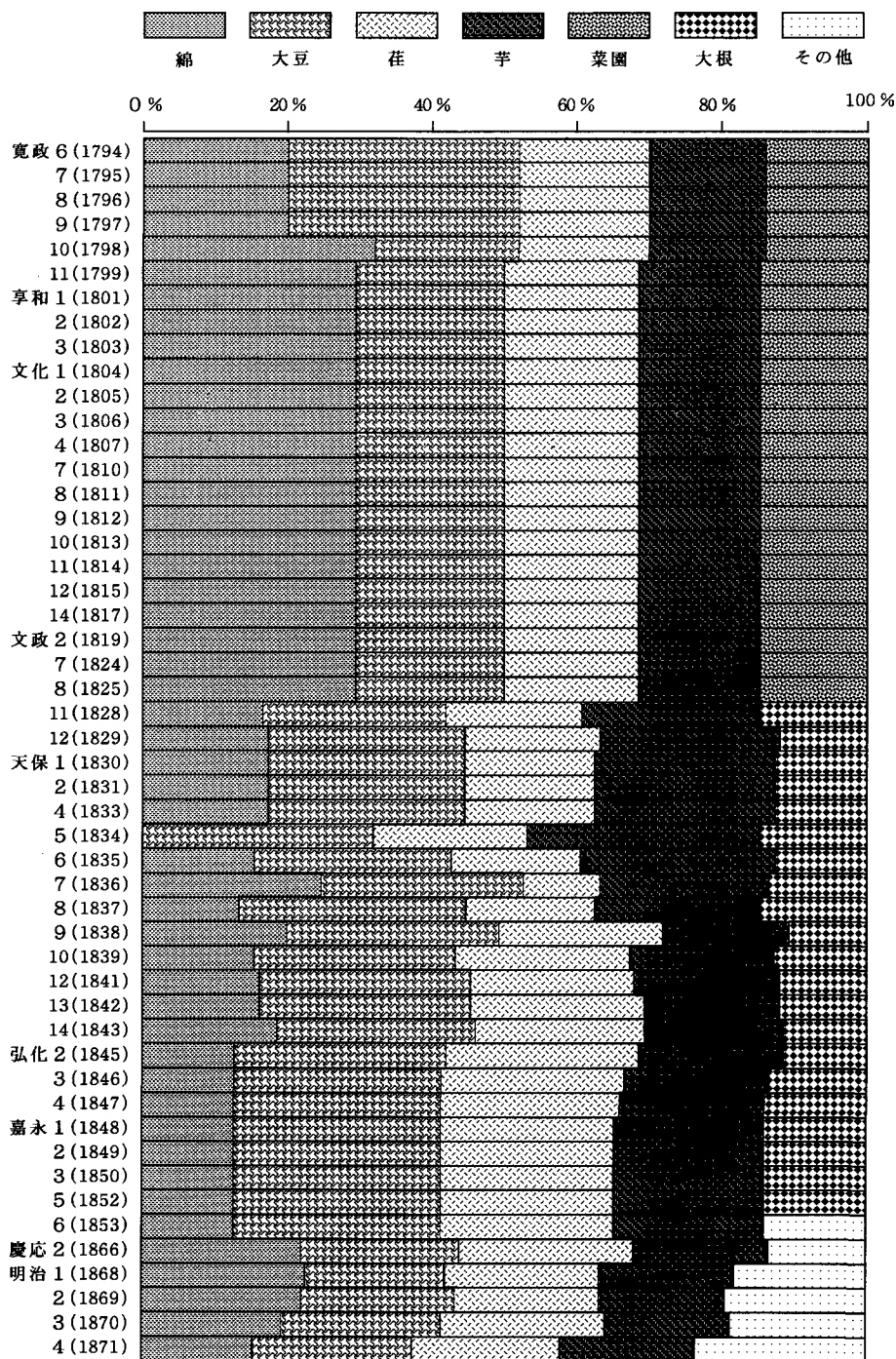


図3 近世後期の尾張国丹羽郡西大海道村における畑作物作付状況の推移
 (「西大海道村田畑面帳」より作成)

積の変化にはそれほど明瞭な傾向は認められず、ほぼ一定の綿作が維持されていたものと解される。

ただ一つ注目されるのが、幕末期の1860-61年、1868-69年の年次にかけて、綿作面積がそれぞれ2町5反-2町1反となっていることである。つまり隔年で、綿作面積が村全体として同様に増減しているということは、綿の作付において、ある程度の集団的規制の存在したことが想像される。当村は枇杷島・清洲・岩倉の各農村市場からほぼ4 km 圏内に位置しており、農産物の商品化においては有利な場所にあったと言えよう。

(5) 丹羽郡西大海道村の事例

岐阜街道一宮宿の北東約4 km に位置する西大海道村は、田1町8反余り、畑25町3反余りの畑作農村であった。18世紀末頃の戸数は102戸、人口374人の村で、一宮宿の加助郷村にも指定されていた¹⁴⁾。同村の畑地の土地利用を示したものが図3である。

同村における綿作率は高い時で約30%、低い時で約17%である。1798年以前においては綿作率は20%程度であったが、以後は大豆作付面積が減少するかわりに綿が増加し、綿作率は1825年頃までは30%と高かった。しかしその後、綿作の減少にともなって逆に増加するのは、大豆と芋の生産である¹⁵⁾。『尾張徇行記』によれば、「農事ヲ専ラ生産トシ、畠多キ所故荏大豆ヲ第一ニツクレリ」とあるように、大豆は荏とともに筆頭畑作物であり、年貢としても納められ、芋はおそらく農民の食料となったであろう。このように、1825年以降は芋・大豆などの食用作物生産の比重が高まり、綿作率は幕末にかけて20%を下回るようになった。明治期に入り、やや綿作率は高くなるが、19世紀初期の段階にまでは回復しなかった。全年を通じて免率（年貢率）が40%程度以下であるのは、相対的に畑地の方が多かったためと考えられる。

V. 尾張綿作の諸側面と綿織物製品の分化

(1) 綿栽培体系と綿作立地

尾張においては、田方綿作がみられないのが一つの特色である。綿はおおむね畑地のみで栽培されていたものと考えられる。各村の「田面帳」からみる限り、綿は連年作付されている可能性が高い。中島郡板葺村の例をみると、1746年時点では、綿作地7反12歩は村内各所12の字に分散し、団地化してはいない¹⁶⁾。綿は麦との二毛作として多く作られている。全村で12町余りの綿作面積があった起村の場合をみても、冬作時の畑地の土地利用は、畑地30町のうち28町が麦で、7反が菜種であった。また、水田16町余りの裏作は4反が小麦、2反が菜種で、大半が湿田であったために、後述するような「畔田」にすることができなかったようである¹⁷⁾。中島郡中島村では、夏作と冬作の状況が判明する。史料の年代は不明であるが（おそらく明和期頃ではないかと推測される）、冬作地は畑地に限られ、村全体の畑地約22町のうち18町余りがわせ麦、残り4町余りが小麦としてそれぞれ作付けされていた¹⁸⁾。

丹羽郡の西大海道村の1878年時点での「田畑作付調査」¹⁹⁾によれば、「田方悉皆耄毛作、畑方本作 麦九分九厘 菜壹厘、(畑方)跡作 大豆貳歩 綿三步 藍壹歩八厘 芋五厘 粟壹歩 牛房貳厘 荏壹歩五厘」とあり、水田は一毛作でありかつ菜すなち菜種の作付率は極めて低かった。同様に、中島郡下津村の例では、明治38(1905)年時点の水田総面積77町余りの内一毛作地は71町余となっており、水田裏作率は極めて低かった²⁰⁾。

田方綿作がみられない理由の一つに、尾張平野の西部地域は、自然堤防が発達し、畑地率も高かったため、綿作適地が十分に存在したこと、一方では後背湿地部の低湿性があったのではなかろうか。図4は『尾張徇行記』に記された「沼田」や「卑湿地」つまり低湿地村の分布であるが、中島郡以南はおおむね低湿地状態がみられたと言えよう。特に木曽川の場合、自然

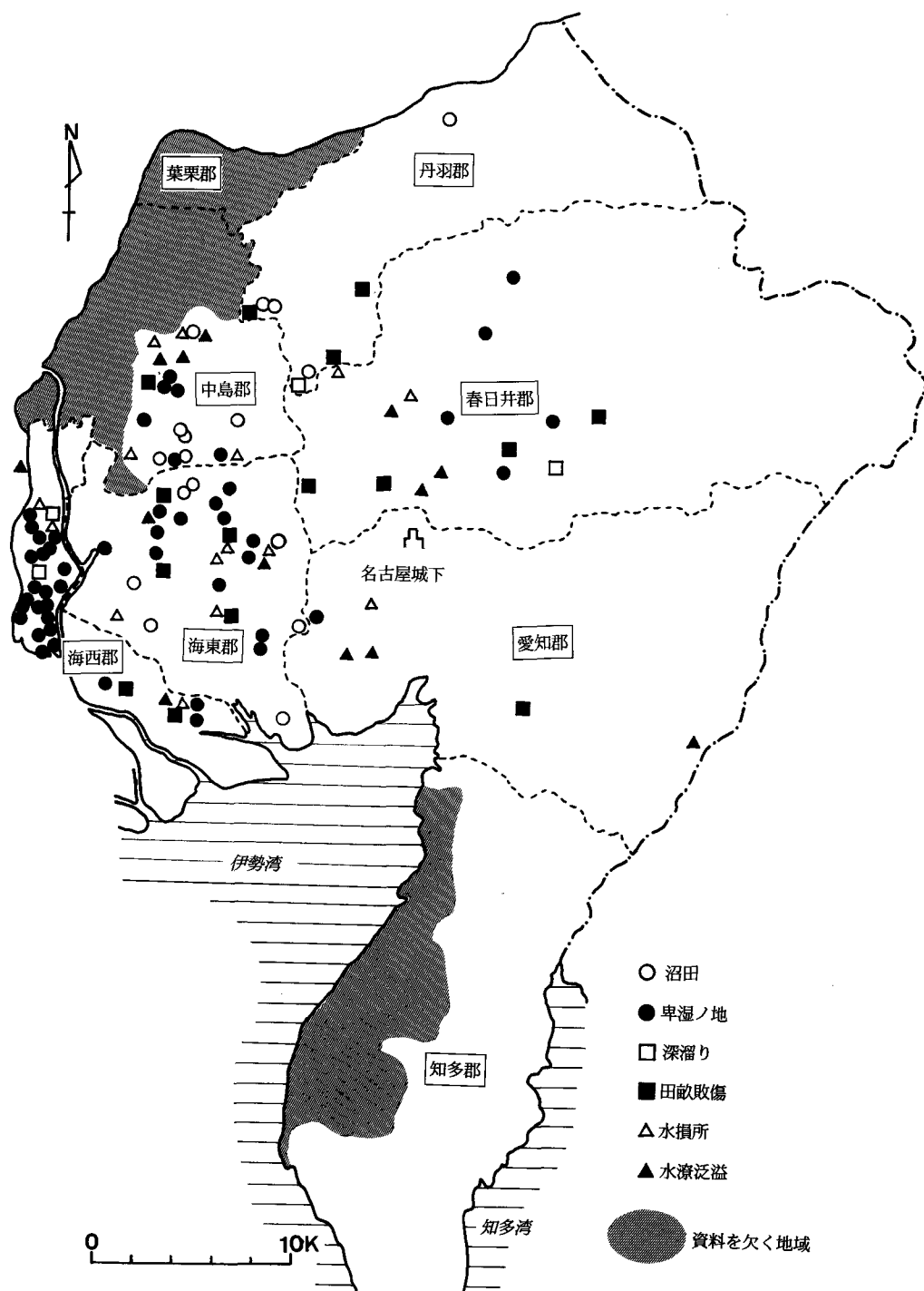


図4 「尾張徇行記」に見られる低湿地村

(浅井阿由子「尾張南部低湿地地域における近世以降の土地条件と農業をめぐる地域的対応」愛知教育大学1990年度卒業論文、より作成)

堤防の比高が高かったため、後背湿地の中心部は水面として残されていた。しかし、これらの沼沢地もやがて水田化が進んだものの、明治期においてもなお、かなりの部分の水田が沼田であったという²¹⁾。また、既述の一毛作田の比率の高さはそれを物語っている。

尾張では明治初期においても、田の収穫高は良いところで反当2石3斗程度であり、中島郡全体では、1石3斗(1877年)・1石2斗(1878年)であったし、丹羽郡では1石1斗(1878年)、葉栗郡では1石3斗と、総じて低い²²⁾。中島郡や丹羽郡の稲作率(水田面積に対する稲作付面積の割合)は97%近くであり、稲と競合する田方綿作の入り込む余地はまったく無い。

伊勢湾沿岸部の新田地帯は、特に土地が低く低湿地が多かった。海西郡の大宝新田では、裏作をするために「畔田」と呼ばれる方法をとっていた。「畔田」は、中島郡起村辺りでも一部行われていたが、その中心はやはり南部低地地帯であった。「畔田」は稲の収穫後、裏作のために土を盛り上げて高うねにするもので、そこでは菜種や麦を栽培した。そして田植え前には再びその土を切り崩して平面にするというものである。これは昭和30年代まで行われたと言う。しかし、この方法はあくまで裏作に対応するものであって、夏作用の畑地を確保するものではなく、したがって「畔田」では綿作は行われない。

大宝新田の大地主であった長尾家では、元禄16(1703)年に、すでに畑地で178斤(金3両2分)の綿を生産している²³⁾。この綿は、同家の収益85両2分のうち4%にあたっていた。村全体では、嘉永4(1851)年の綿の作付け面積は9反1畝で、これは畑地の12.2%を占めていたが、これもすべて畑方綿作として行われていたようであり、綿は里芋とともに一毛作となっていた。近世においては、水田での綿作に対し、何らかの領主的規制があったのではないとも思われる。したがって、綿はもっぱら畑地で、麦類との輪作によって栽培されていたと考えられる。

しかし、明治期にはいると、水田での綿作が実施されたことが次の点からうかがわれる。伊

勢湾沿岸部の干拓新田地帯でも綿作がみられたが、表8はその愛知郡の新田地帯における、明治期の綿作率を推測したものである。これをみると、畑地での綿作率が100%を越えている新田がいくつかみられる。つまりその新田では、田方綿作が行われていた可能性がある。このように明治期になると田方綿作の記事がみられるようになる。明治16(1883)年の丹羽郡・葉栗郡の『農事通信』の記事によれば、「草綿 旱損ノ憂アリ当今景況六七作ノ景状但シ田綿湿地ノ場所ハ此限ニ非ス²⁴⁾」とあり、明治10年頃には、この地方では水田で綿が稲と競合関係にあったと考えられる。畿内においても、この時期にはやや綿作が復活したようであり、田方綿作が再び実施されたことが推測されている²⁵⁾。

以上のことから、尾張では自然堤防地帯の畑地での綿作を中心として綿が生産されたが、明治期になると、水田でも綿が作られるようになったことがわかる。しかし、これはおそらく一時的現象ではなかったかと思われる。

尾張藩の地方役人の執務便覧とされた『税賦参定指南』には「麦生綿は半作、稗は四半作也。但し生綿は麦の間に蒔附、秋過迄有る故に半作に立²⁶⁾」とあるように、綿は畑作物としてのみ、

表8 明治10年愛知郡新田諸村における綿作状況

新田名	綿生産量	推定綿作面積*	畑地面積	推定綿作率
	貫	畝	畝	%
熱田新田(西組)	153	61	754	8.1
熱田前新田	5,000	2,000	7,648	26.1
当知新田	3,087	1,235	982	125.8
甚兵衛後新田	550	220	473	46.5
神宮寺新田	2,100	840	385	218.2
宝来新田	665	266	682	39.0
東起村	432	173	1,118	15.5
稻富新田	3,030	1,212	553	219.2
永徳新田	118	47	935	5.0

注) *綿反収を25貫として計算

(『愛知郡村誌』より作成)

とらえられていた。

綿の栽培暦に関しては十分な史料がないが、明治期の「農事通信」などによれば、尾張では、5月中旬に播種し、9月上旬には綿が笑み始め、取り入れは11月下旬まで行われたようである²⁷⁾。5月中旬は八十八夜過ぎに当たり、河内辺りの農書『家業伝』や、大蔵永常の『綿圃要務』に記される播種期と比べるとやや遅いが、大きな差ではない。

(2) 綿作の経営規模とその生産性

尾張の場合、個人別の綿の作付け状況を広範に知る資料がなかったため、「田面帳」に記された村別の総綿作面積を総戸数で除して1戸当たりの綿作面積を算出した(図5)。当然、各村の中には綿作を行わない者もいるので、実際の1戸当たり平均綿作規模は、求めた値よりもさらに大きくなるであろう。しかし、いくつかの村の例でみる限り、9割近い者が綿作に従事しているので、相対的には妥当な値と考えられよう。

これをみると、中島郡東部から丹羽郡西部・春日井郡西部にかけての一带に、綿作規模の大きな村々がみられる。図5は同一年次の綿作規模を示していないので、この地域的分布についての細かい分析はできない。図1と図5を大まかに比較すると、綿作率が高かった地域では、おおむね綿作規模も大きいと言えよう。それよりも、ここでは、1戸当たりの綿作規模が1反を上回る村がかなりみうけられることに注目したい。平均の綿作面積が1反を上回っていることは、畿内の例と比べても遜色はない²⁸⁾。

明治期における例から綿作規模を検討したものが、図6である。丹羽郡多加木村の1868年時点での綿作面積は9町2反7畝で、綿作率は39.4%であった。1878年時点での総綿作面積もほぼ同じで、9町4反6畝程度であった。史料³⁰⁾から判断すると、119名の農民のうち、87%に当たる104名の者が綿作を行なっていると考えられる。したがって、綿作者1人当たり平均綿作面積は9畝ほどである。ただし村外で行っている綿作分を加えると、1人当たり1反程度となる。

また、1反当たり収量は平均69斤であった。1斤を320目として考えると、それは22貫になる。図6から、綿作規模の大きな農民の場合、反収も平均以上であることがわかる。一方、綿作規模1反以下層では反収のばらつきが大きい。これは、綿作が集約的作物であって、灌漑・施肥の管理などの違いによって、収量に10倍以上の差が出ることの証明とも言えよう³¹⁾。このように村内でも、綿作に積極的に取り組む農民と、そうでない者との分化が存在していたことも指摘できる。

同じく、明治10年当時の海東郡の場合、反収は160斤で、この場合1斤が160目と考えられるので、反収は25.6貫となる³²⁾。表9は明治13年の葉栗郡更屋敷村の綿作調査の結果であるが、当時の平年反収は16貫程度と低い。同年の実綿産額は1,130斤、それに対する綿作反別が2町4畝なので、1反当たり55斤の収穫となる。この当時の実綿の価格は1斤当たり14銭2厘なので、更屋敷村の場合、反当販売額は7円18銭となる。明治13年の更屋敷村の綿作1反歩諸費、つまり綿作の反当コストが10円50銭とあるので、明治13年の同村の綿作は、明らかに採算が採れていない。明治23年の中島郡下津村の綿作1反歩収支比較を示した表10をみると、支出14円74銭余(うち肥料6円97銭)に対し、収入16円62銭余となり、1円88銭ほどの収益となっている³³⁾。

中島郡の明治14年から18年にかけての「農事年報³⁴⁾」によれば、中島郡全体としての綿の平年反当収量は明治14年から1年ごとに、それぞれ30貫、26貫、23貫、16貫、12貫と推移しており、年々低下している。また、明治14年の同郡の「農事年報」には「綿ハ二三年前ヨリ諸物ト比較シテ安価ナリキ故ニ□□□□作付二分余モ減セリ(後略)」とあり、明治12、3年頃より綿は明らかに衰退傾向を見せ始めており、反収の低下もそれを物語っていると思われる。明治17年における全国の実綿差額は1,554万貫、作付反別は9万6,000町歩余りであるから、実綿反収は約16貫となるので、同年の中島郡はほぼ全国平均並みの反収であったと言えよう。

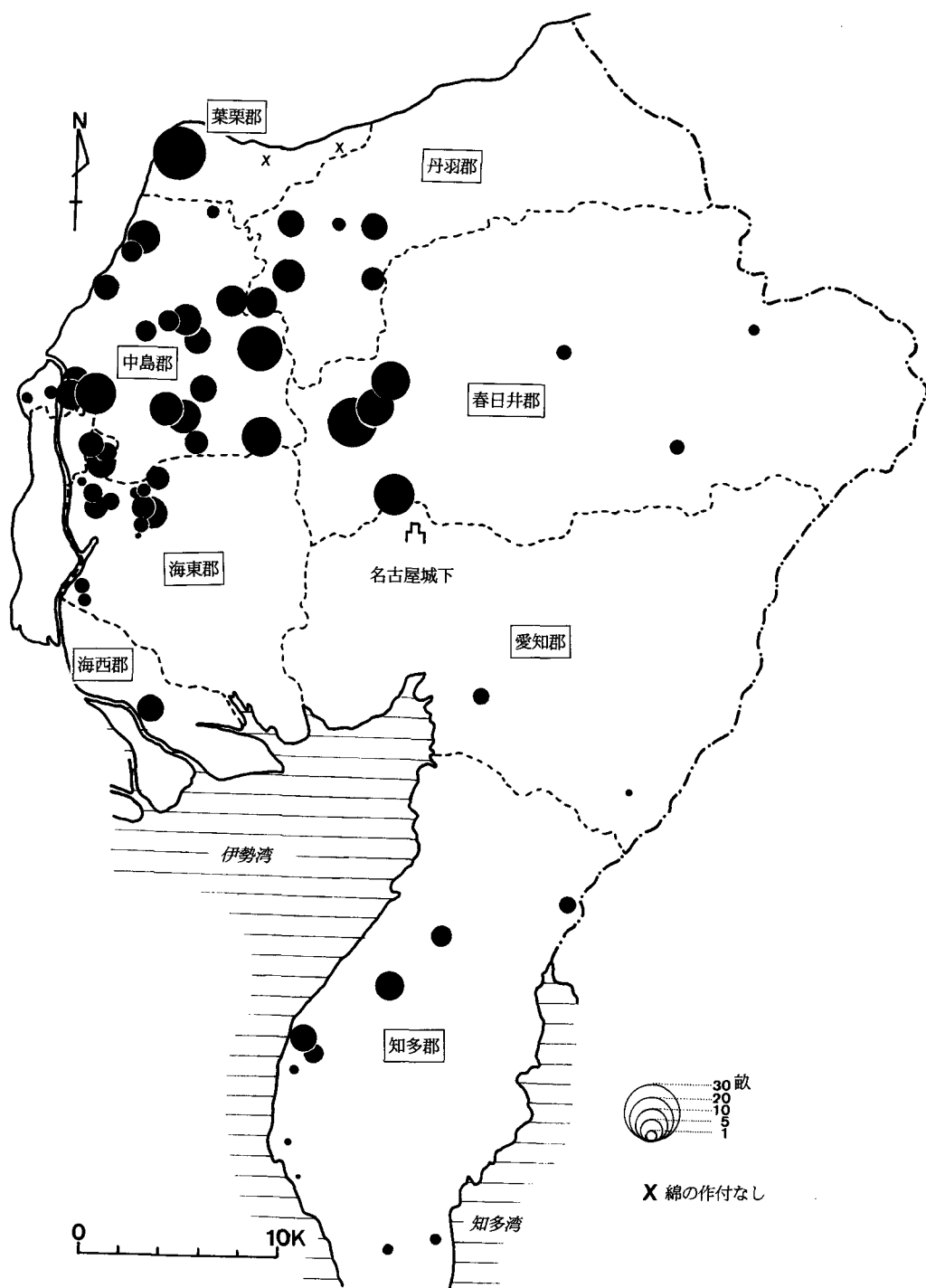


図5 19世紀前半頃における1戸当たり綿作面積
 (『尾張徇行記』および各村に残る「田面帳」より作成)

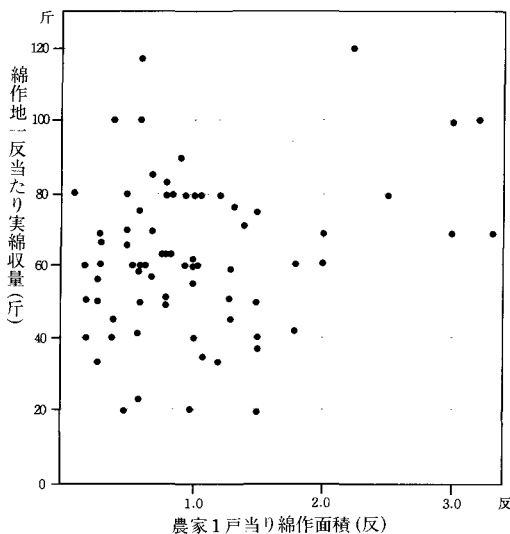


図6 明治11年尾張国丹羽郡多加木村における綿作経営農家1戸当たりの綿作面積と実綿反収との関係

(「明治11年丹羽郡多加木村農産調査表」より作成)

生産力と密接に関わる施肥についてみると、綿作中心地では、盛んに干鰯・麦粕類をはじめとする金肥が用いられていた。また藩も、農民に対し時には肥料の貸付をするなど、金肥はかなり普及していたと言えよう³⁵⁾。当地方の干鰯は、伊勢の四日市から買い入れていた。また干鰯ばかりではなく、麦粕や種粕なども四日市から買い入れられた。中島郡起村では、天保11(1840)年に年間金130両分の肥料を購入している。その内訳は、干鰯50両・出し干鰯10両・種粕30両・真粉粕30両・糠10両となっており、

多様な金肥が用いられていたことがわかる。試算的に起村における耕地1反当たりの肥料投入価格を出してみると、起村の新田を含む総耕地面積は約47町余り(田14町、畑33町)であるから、1反当たりの金肥投入価格は約金1.1分となる。おそらく金肥は、綿や藍等の工芸作物に多く投下されたであろうから、綿への金肥投入価格は実際にはもっと多かったであろう。

肥料の種類は、場所によってもかなり多様であった。例えば表3に示したように、知多郡辺りでは、干鰯(干鰯)の他に藻草・灰・山草等も用いている。土地により、肥料にも適・不適があったようで、『尾張徇行記』の知多郡緒川村の項³⁶⁾には「一体藻草ハ土地ニ遇ハサル故ニ不採海土ヲ以テ土糞トス、又干鰯灰を専ラ土糞ニツカフ、灰ハ紀州熊野ヨリ運漕セリ、一体熊野灰ハ柴木ノ灰故ニ能土地ニアヘリト云」とあり、灰は遠く紀州熊野より買い入れていたようである。知多郡有脇村には2軒の灰問屋まであった。このように、場所によっては、購入肥料の他に、

表9 明治13年葉栗郡更屋敷村における平年と比較した綿作状況

	平 年	明治13年
綿作反別	2町7反3畝	2町4畝
綿作率	9.9%	7.4%
綿収穫	436貫800目	290貫300目
1反歩収穫	16貫目	14貫230目
綿作反当諸費		10円50銭
総反別	27町6反5畝10歩	

(「新編一宮市史 史料編補遺3」による)

表10 明治23年中島郡下津村における作物別反当施肥量・価格および収支損益

肥料	餅搾粕		大豆		藁		味噌粕		人糞		積土		種油粕		肥料計	収支損益(1)	収支損益(2)
作物	貫	円	斗	円	束	銭	貫	銭	荷	銭	荷	銭	石	円	円	円	円
米	7.5	1.60	3	1.20	2	2									2.82	損1.76	益1.87
大麦			6	2.00	3	3	20	50	10	30	40	40			2.75	損2.535	益0.87
裸麦			6	2.00			20	50	10	40	40	40			3.30	損2.173	益1.187
小麦			8	2.66			20	50	10	40	40	40			3.96	損0.125	益3.055
綿	5	1.15			2	2			10	40			1.5	5.40	6.97	益1.88	益6.215

注) 収支損益のうち、(1)は農家の労働報酬を考慮(差し引き)したもの、(2)はそれを考慮しないもの。

(「稲沢市史 資料編16 近現代3」より作成)

山草や藻草などの自給的肥料も用いられていたと言えよう。

次に、明治期における綿と他作物の施肥の数量の比較を、表10に示した中島郡下津村の例でみると、種油粕が用いられているのは綿に対してのみであり、1反当たりの施肥総代金は綿が最も高い。下津村の綿作の場合には、生産経費の約47%が肥料に当てられており、これは米作の場合の21%、大麦作の32%、裸麦作の36%、小麦作の41%に比べても最も高くなっているように、典型的な多肥作物であったことがうかがわれる。

(3) 綿生産の変動とその社会的背景

綿生産の経年的変化を、ある程度連続して追うことができる史料は、先に示した丹羽郡西大海道村である。その変動については既に図3で示した。その大まかな傾向としては、寛政末以降、綿作率は上昇するが、天保頃から低下するというものである。この傾向に対する理由付けは十分な資料がなく、推測の域を出ないが、次のようなことをその理由として挙げておきたい。

当地方では天保初年頃から「結城縞」と呼ばれる織物が生産され始め、それに伴い、それまでの中心的織物であった「さんともし棧留縞」は衰退していった。天保期を通じて「やうまし棧留縞」から「結城縞」への商品の質的転換、すなわち日用品生産（やうまし棧留縞）から奢侈品生産（結城縞）への転換が進行し、それとともに生産手段が棧留機（地機）から結城機（地機改造型）へと変化したため、「結城縞」生産に関する新しい製織技術の伝習・導入の必要性が出てきた。ところが、当然農家はこのような結城機を所持していないので、織元は結城機を農家に貸与して賃織りさせる方法（引機制）を導入した。織元はあらかじめ製織技術を抱奉公人に修得させ、やがて奉公人の年季が明けて故郷へ戻し、引き続き引機制によって結城縞の生産を継続させたのである。このようにして天保期以降、出機制が普及していったと言われる³⁷⁾。

また、織機所有者に対しては運上金が課され

ていたが、出機の運上金は内機のその半額であったという、税制上の有利さもあったかもしれない。出機の運上が内機のそれを下回る背景としては、次の史料³⁸⁾(1844年)がそれを明らかにしている。

「惣織屋共の内出機と相唱織元より百姓家え賃織ニ差出候は四百六拾四御座候処、右の分ハ先達ても申上候通女房ニ織セ申候処、春作、夏作、秋作取入時節ハ勿論田方植付並蒔物時節ニハ織方相休、家内の給物仕拵候透々ニ織申候故一向得織不申」

つまり、出機制が農家婦女子の農間余業として行われたために、当然生産量は内機に比して不安定で低かったのである³⁹⁾。

筆者は、このような文政期から天保期にかけての織物業の生産形態の変化は、当地域の綿作にも少なからず影響を与えたと考えている。つまり出機制の普及、および生産手段の変化に伴う織物生産量の増大が、農業労働力としての婦女子の就労を妨げたことが推測される。なかでも集約的作物である綿の場合、投下女子労働力の減退は、その経営をかなり圧迫したものと考えられる⁴⁰⁾。換言すれば、天保期頃を境にして、農村織物業が波及した村々では、綿作中心の農家経営から織物中心のそれへと移行したのではないだろうか。そのことが、西大海道村にみられる天保期以降の綿作面積の減少と関わっているのではないかと推測される。葉栗郡嶋村においては、文化年間から文政頃にかけて、村内に新たに棧留縞機屋商売を開始したい旨の願書き⁴¹⁾がみられることも、これらの地域への織物業の波及とみることができよう。

天保14年の触状では、国産会所設立にともなう領内木綿生産の後退に対処するため、藩では各農家に木綿生産の割り当てを行なっているが、そのなかに、「但繰綿を以綴糸ニいたし、其上織立之所迄手数懸り年内織上候儀無覚東候ハバ、綴糸ニ而も買入織上候共、尤不苦候⁴²⁾」とある。このことから当時、綿作一繰綿生産一綴糸（紡糸）一製織の工程が未分化であったことがうかがわれる⁴³⁾。そして藩では、綴糸を購入して製織のみ

を行う専門層の存在を認めている。それによって製織工程部門の比重が高まり、当地域の綿作部門のそれは、相対的に低下したことが推測される。このような状況が、尾西地域に先行する美濃綿綿業地帯では、すでに18世紀末頃より起こっていた。ここにおいては、綿織物業の進展にともなって、富農地主層が農業奉公人や小作人の確保が困難となりつつあったことが知られる⁴⁴⁾。

ただ図3に関して言えば、1799年より1825年まで、全く同じ作付け状況というのはやや疑問である。1828年以降は年により差があることから、ある程度実態を反映しているかとも思われる。この史料は、一定の書式に従って、村方より管轄の陣屋へ差し出したものなので、前年と大きな違いがなければ、前年のものをそのまま転記した場合もあったかと思われる。1828年から綿作面積が急に半減したように見えるが、それはおそらく、書類上の作付け状況と実態との間にかなりのくい違いがみられるようになったために、実態に合わせるべく内容を変更したのではないかと判断される。そう考えると、綿作面積は、1825年以前において既に漸次的に減少していたのではないかと思われる。そして逆に、綿織物業は拡大しつつあったのではないだろうか。一宮村では安永3(1774)年の綿作検見時の綿作率は46%であったが、文久2(1861)年では、40%にやや低下している。このように天保期(あるいはもっとそれ以前の19世紀初期)以降、尾西地域、とくに綿織物業が高度に発達した地帯では、綿作の縮小が起こりつつあったと推測される。

幕末期に至ると尾張では、綿不作を理由に近隣諸国より綿を買い入れている⁴⁵⁾。綿の買い入れ先は、三河の大浜・岡崎、遠江の三ヶ日辺りである。諸国綿を買い入れては、貧民にこれを貸し付け木綿として織らせ、貧民救済と国益向上を図ったのである。綿不作が尾張地域にのみ発生したとは考えにくいので、おそらく尾張藩内において生産される木綿の生産量に比較して、相対的に原料綿が不足したために、このような

措置が取られたのではなかろうか⁴⁷⁾。

(4) 綿生産と肥料価格の動向

綿が多く肥料を必要とする作物であることは、前述した通りである。それは近世中期においても同様であった。葉栗郡里小牧村では、17世紀末の元禄期において、購入肥料の利用が行われていたことが推測され、宝暦2(1752)年の同村の「諸事記」には「当村畑方わた作ニハ少々こやし買候而作申候」とあるし、さらにそれ以前の元文元(1736)年には、里小牧村の農民が、購入肥料として干鰯を利用していたことが報告されている⁴⁸⁾。天明4(1784)年、一宮村の「綿作検見願」には、綿をもっぱら作付けし、年貢諸役銀もこれにより支払っていること、綿畑1反に肥料代金を金2分または3分ほど投じていたが、先年の冬以来肥料も高騰し、綿畑1反につき3分から1両の肥料代となり、しかもその結果は不作で困窮していることが述べられている。このように、当地方でもかなりの金肥が使われたことから、綿作における施肥においては、常に肥料価格の変動が問題となったであろう。

図7は尾西地方における、近世後期の実綿および肥料価格の推移をみたものである。綿価格は、天保10年前後を一つのピークとして、以後幕末期までは低調であった。それに対し、干鰯や粕などの肥料価格、とくに粕価格は、綿価格の上昇に先んじて、安政時代頃より上昇傾向を示している。幕末から明治初期にかけては、肥料価格は急騰してくる。綿の価格も高騰するが、相対的にみると肥料価格の上昇の方が大きい。このことは当然、購入肥料に依存することの大きな綿作にとって、その経営コストを高め、綿作の利潤の低下を招いたであろう。

しかし当地方の、幕末期における綿価と干鰯・粕などの肥料価格との開きは、かつて大坂の綿作地帯で立証され⁵⁰⁾たような、鉤状的傾向の価格の開きではない。この点については、丹羽郡岩倉付近の、綿と肥料の相場との関係においても示されている⁵¹⁾。ただし明治5年以降になる

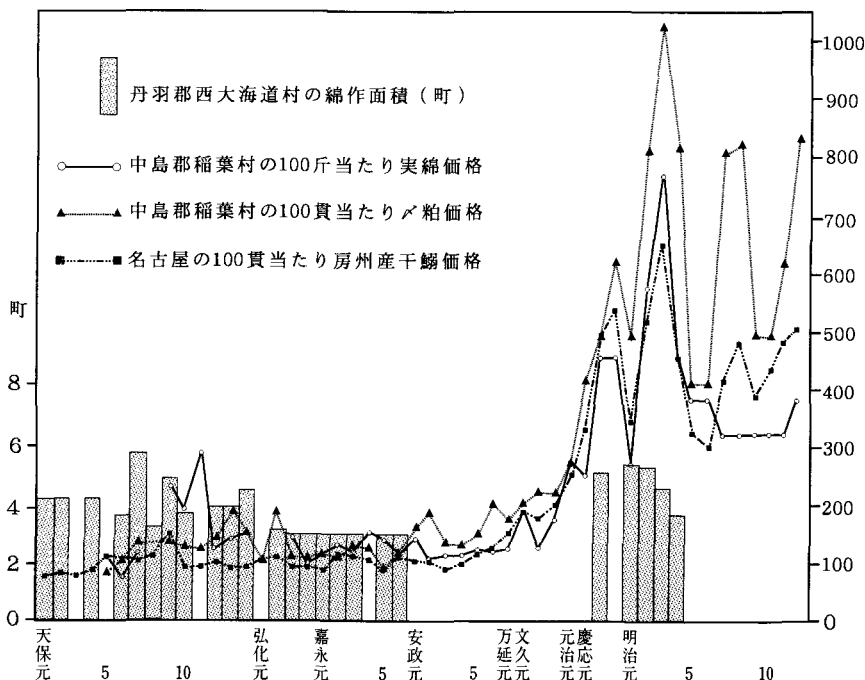


図7 近世後期の尾張北西部諸村における綿作面積の推移と関連諸物価の変動
 実綿・芨粕・干鰯の価格は天保5～7年の3カ年の平均価格を100としたもの
 (『新編一宮市史 資料編10』pp. 606-651より作成)

と、肥料価格の変動に対し、綿価の停滞は明瞭であり、明治10年以降、一時的に綿作の復活がみられるようであるが、趨勢としては、この頃よりしだいに綿作には採算上極めて不利な状況が生まれていったのではないかと推測される。しかし、表10に示した中島郡下津村の場合、明治20年代初期においては、綿は、米・麦類などの主穀作物と比較した場合、相対的には最も収益が大きく、なお綿作がその意義を有していたことは興味深い。

(5) 明治初期の綿織物製品分化の地域的特色

従来、尾張藩領内における綿織物生産は、縮木綿と白木綿の2種類に大別されている。縮木綿生産の中心は、表11に示したように、中島・葉栗・丹羽といった尾張北西部の諸郡である。それに対し白木綿は、知多・愛知・春日井などの南・東部の諸郡での生産が中心となっている。

縮木綿には、江戸時代から明治初期にかけて、

多様な綿織物製品が存在した。歴史的に見ると、明和期に京都から技術の移植が行われた棧留縮や、天明期に同じく京都より伝えられた菅大臣縮が中心であったが、その後文政期に下総結城地方から導入された結城縮の生産が、その中心となっていった。このような、明和以降の綿織物工業の成長と、それに伴う在郷仲買商人の成長は、農村内部の階層分化もひきおこしたとされる⁵²⁾。それは表3にも示したように、一宮周辺では盛んに繰綿が生産され、それを在郷商人が集荷して一宮市へ送っている状況が記されている。

縮木綿は、白木綿に比すれば当然高級品となるが、このような製品が当地方で多く織られた理由として、中世以来、本地方が絹織物の産地⁵³⁾であって、高い製織技術を有していたこと、桑や実綿、さらには染色用の藍の生産地⁵⁴⁾を近辺に控えていたこと、比較的京都にも近く、江戸期においても京都の進んだ製織技術が伝播しやす

表11 明治12年尾張地域における綿織物製品の生産状況

郡・区名	製 品 別 生 産 額(円)					総生産額(円)
	白木綿	縞木綿	結城縞	絞木綿	その他	
名古屋区	—	5,680	—	265,177	38,250	309,107
愛知郡	20,845	247	—	9,772	480	31,344
春日井郡	12,806	6,629	—	—	—	19,435
丹羽郡	13,484	35,871	—	—	—	49,355
葉栗郡	587	35,068	—	—	15,065	50,720
中島郡	7,925	37,809	149,114	—	3,635	198,483
知多郡	111,962	2,783	—	—	—	114,745

注) その他には、木綿小倉織、綿フラネル、段通、綾木綿、木綿小倉帯、綾小倉織を含む。海東・海西郡は生産高の表示がないため省略した。(農商課農務係編『明治12年物産諸調綴』より作成)

かったことなどがあげられる。また、このような結城縞に代表される、絹と綿の交織による先染めという高等技術を用いた織物生産技術の伝統が、その後の尾西毛織物工業発展の基盤となったことは、周知の通りである。表11では、尾西地方から遠ざかるにつれて、結城縞を含む縞木綿の割合が低下していることがわかる。

一方、尾張東部から南部にかけて展開する白木綿生産地帯は、知多郡を除けばそれほどの生産額を有しない。明治12年当時において、海東・海西両郡の織物生産量が不明であるため、尾張全体の織物生産額も不明であるが、上記両郡を除外して考えると、尾張の白木綿生産量は54万4,700反となり、そのうち知多郡は69%にあたる37万7,600反を生産していた。ただし江戸時代においては、知多を除く尾張7郡は、晒加工をしない生白木綿を中心として「名古屋白」と呼ばれ、知多郡は晒木綿の生産を中心として「尾張白」と呼ばれていた。両者はその用途も異なっており、「名古屋白」は裏地や紋地用にされ、「尾張白」は手拭いや下帯用などに利用された⁵⁵⁾。知多の木綿生産は、伊勢より晒技術を導入して以来、急速に発展をしたとされ、尾張の中では比較的新しい織物産地であった。それまでは知多でも、半製品である生白木綿の生産を行っていたが、文化・文政の頃から晒木綿が中心になっていったのである。

もう一つの綿織物産地は、名古屋である。明

治初期において名古屋は、尾張地域のうちでも最大の織物生産地であった。その織物の中心は、表11にも示したように、絞木綿であった。これは、江戸初期に始まる、鳴海や有松において盛んであった鳴海絞・有松絞系統の絞木綿生産であった。絞木綿は、「括り」という作業を中心とした木綿加工で、高級品であった。慶応3年には国産絞と呼ばれるものも登場し、名古屋城下においても絞木綿が製造されるに至った⁵⁶⁾。明治初年頃においてこれらの絞木綿は、尾張藩の保護を失ったために衰微しつつあったが、一部製造工程の機械化や新奇の絞り形を考案するなどして、漸次その生産を回復していった。明治10年頃においては、名古屋区における絞木綿生産が、起源地である有松や鳴海地区を凌いでいたことがうかがわれる。このように、尾張地域で多様な綿織物製品が領内各地に展開していたことは、大きな特色と言えよう。

VI. 結 語

「マニュ」論争の舞台ともなった尾西地域は、当時において、わが国を代表する綿織物業地域として成長していた。また、時期はやや遅れるものの、知多も晒技術の導入以降有力な綿織物業地へと発展していった。両地域ともに、まずは地元の綿作生産に基盤を置いていたものである。

尾張綿作の中心は近代・近世の諸資料から判

断して、尾西地方であることが推測された。当地域は尾張平野の北部にあって、自然堤防卓越地帯となっており、畑地率もかなり高い地域に当たっていた。隣国三河の綿作地帯がそうであったように、ここでも綿作の中心地は、このような自然堤防地帯であった。ただ、圧倒的に尾西地域が生産の中心であったかという点、そうではなく、愛知郡・春日井郡などの生産額もかなり多い。知多郡は綿作地帯の一角を担っているが、地元の知多も、木綿の原料を十分に賄うことができなかったようである。近世の尾張地域においては、綿はほとんど畑作物として栽培され、「田面帳」などの史料から、最盛期にはその畑地での綿作率が60%を越えていた村も存在した。綿の栽培形態としては、畑方綿作が中心であったこと、麦類との輪作においてなされたことなどが知られる。

綿作の経営規模に関しては、中心地域では1戸当たり1反以上の綿作経営を行なっている点は、先進地畿内のそれに比較しても、同等の規模を有していたといえる。ただ土地生産性の面では、尾張の綿作地帯は中等程度の反収であったと判断される。ただし生産性の点で言えば、農民個人レベルで見た場合、その収量の開きはきわめて大きかったことが、明治期の資料より裏付けられた。土地生産性に大きく関わる施肥に関しては、金肥のほかに、その土地独自の自給的肥料があったことが推測された。尾西地域では、干鰯や粕類をはじめとした多様な金肥が導入された地域もあったが、知多のように藻草・灰・山草など、地元において供給可能な肥料が施されていた。

綿生産の年次的変化についても分析を行なった。これに関して長年にわたる綿生産の変動を追うことのできる資料は少ないが、尾西地域の2、3の村の事例より、農村織物業が波及した19世紀初期をピークに、綿生産の方は織物生産に労働力を奪われ、やや衰退していったのではないかと推測された。かわって織物業の周辺地帯は、綿織物業の原料供給地として、綿作は維持されたと考えられる。

天保期にピークに達した尾張の綿織物業は、やがて藩の封建的搾取を受けることとなり、木綿の専売制の中に取り込まれていくこととなった。このことは、尾張が綿織物生産において、高度な発展をしていたことを物語っていると同時に、隣国三河のような非領国地域と異なって、尾張が一円的な藩領域経済圏として機能していたことを示している。ただ知多半島地域は、やや独自の動きを示しており、特色ある地域といえよう。これは知多半島が、海上交通の面からみて遠隔地間交易に有利であったことが、その一因と考えられる。

尾西および知多を核とする尾張の綿織物業は、地域ごとに製品を異にした多様な綿織物業地帯を形成していたことも、もう一つの特色である。当地域の綿織物業の発展は、18世紀半ば以降における種々の織物技術の伝播に始まる。尾西地域では、製品の転換を図りながらも、各種の製品が地域ごとに多様に展開した。知多では晒加工技術の伝播によって、白木綿生産を確立していった。さらに幕末から明治初期にかけては、名古屋を中心とする都市において綿織物業の飛躍的な伸長が推測されるなど、一つの藩内において多様な生産形態や製品を生み出していった点は、尾張綿業地帯の最大の特徴と言って良いのではなかろうか。

(愛知教育大学教育学部)

〔注〕

- 1) 岩崎公弥(1985): 西三河地域における近世綿作の地域的特色, 地理学評論58-6, 349~369頁。
- 2) 永原慶二(1990): 『新・木綿以前の事』中央公論社, 216頁。
- 3) 岩崎公弥(1982): 東海地域における江戸時代の綿および木綿生産とその流通, 石田寛教授退官記念事業会編『地域——その文化と自然』福武書店, 38~50頁。
- 4) 近世後期の尾張地域に関する経済発展をめぐる主な諸論考としては次のような研究があげられる。

塩沢君夫(1956): 尾西地方における寄生地主制

の成立、歴史学研究会編『明治維新と地主制』岩波書店、71～111頁。

中村 哲(1956)：幕末期における農村工業の展開——濃尾綿織業の分析——，日本史研究28，21～47頁。

林 英夫(1956)：近世末期における尾西綿織物の展開過程——経営形態を中心として——，社会経済史学22-5・6，44～74頁。

塩沢君夫・川浦康次(1956)：『寄生地主制論』御茶の水書房、312頁。

林 英夫(1960)：『近世農村工業史の基礎過程』青木書店、226頁。

林 英夫(1965)：『在方木綿問屋の史的展開』搞書房、211頁。

以上のうち塩沢・川浦・中村らは幕末期尾西地方におけるブルジョアの発展を認め、天保期頃の綿織物生産においては、マニユファクチュアが中心であったとした。一方、林は当地域の天保期にいたる小商品生産の発展を認めながらも、それはブルジョア的発展ではなく、生産形態も問屋制家内工業が主体であったと主張している。両者の論争に関する論点の整理については、次の文献を参照されたい。

田中 彰(1957)：ブルジョアの発展と寄生地主制をめぐる——塩沢君夫・川浦康次著『寄生地主制論』——，歴史評論91，48～54頁。

- 5) 江戸時代後半からとしたのは、史料上の制約もあるが、綿織物業の発展時期が18世紀後半から19世紀前半にかけてであり、綿作の動向との対比が可能であるということによる。また明治20年頃までを対象としたのは、わが国での綿作がこの頃を以て終焉を迎えること、および綿作の規模や生産性についての史料がこの時期において比較的多く得られたことなどによる。
- 6) 明治文献資料刊行会編(1964～65)：『明治前期産業発達史資料』別冊(1)(2)(3)(4)(明治9～12年全国農産表)。
- 7) 名古屋市教育委員会編(1964～69)：『名古屋叢書 続編』第4～8巻(尾張徇行記)。
- 8) 名古屋市教育委員会編(1965)：『名古屋叢書 続編』，第2巻(寛文村々覚書)，166～172頁。本書において、起村は絹屋起村と呼ばれ、小信・中島村は小信村と中島村に分けて記載されている。

9) 前掲4)の林(1956)によれば、起村の人別改帳では、弘化2(1845)年の女子総抱奉公人178人のうち143人が、嘉永3(1850)年の女子総抱奉公人121人のうち101人がそれぞれ織屋職関係の奉公人であった。

- 10) 一宮市(1968)：『新編一宮市史 資料編8』235～237，368～369頁。
- 11) 前掲4)林(1956)
- 12) 尾西市史編纂委員会(1988)：『尾西市史 資料編3』252頁。弘化元(1844)年の「村方願違書」の中で、起村の管轄にあたる韃多須代官支配区域内では、出織機1桁につき金7両の為替金であったが、北方や清洲代官支配下の村々では、それが3両2分であるので、起村地域でもそれに習い為替金の減額を要求している。
- 13) 前掲12)，149～150頁。
- 14) 前掲7)，第3巻，121～123頁。
- 15) 前掲12)，34頁。
- 16) 新修稲沢市史編纂会事務局(1988)：『稲沢市史 資料編10』5～7頁。
- 17) 前掲12)，544頁。
- 18) 尾西市史編纂委員会(1992)：『尾西市史 資料編6』13～16頁。
- 19) 一宮市(1968)：『新編一宮市史 資料編13』522～523頁。
- 20) 新修稲沢市史編纂会事務局(1989)：『稲沢市史 資料編16』229頁。
- 21) 大矢雅彦(1993)：『河川の開発と平野』大明堂，28～34頁。
- 22) 前掲6)に記された米の収穫高を播種地面積で除した。
- 23) 岡 光夫(1981)：農稼録，解題，『日本農書全集』第23巻，204～254頁。
- 24) 明治16年7・8月分農事通信，丹羽郡・葉栗郡，一宮市(1983)：『新編一宮市史資料編 補遺4』240～241頁。
- 25) 中村 哲(1963)：明治初年における綿作の地域性，人文学報18，71～116頁。
- 26) 名古屋市教育委員会編(1962)：『名古屋叢書 第10巻 産業経済編(1)』345頁。
- 27) 「明治16年 農事通信原議 勸業課」(国立資料館蔵)によれば、綿の播種開始日が、海東・海西両郡では5月20日、愛知郡では5月10日、中島郡

- の播種日は不明であるが、収穫は9月10日から11月30日までとある。
- 28) 木下清左衛門『家業伝』（『日本農書全集 第8巻』農山漁村文化協会）での綿の播種日は八十八夜前後4～5日、大蔵永常『綿圃要務』（『日本農書全集 第5巻』農山漁村文化協会）でも八十八夜前後を目安としている。ちなみに八十八夜は陽暦の5月2日頃に相当。
- 29) 前掲1)。隣国三河の場合は、その綿作中心地である矢作川沖積低地の自然堤防地帯の村においては、1戸当たり綿作規模が1反を越えていた。
- 30) 「明治11年農産調査帳」、一宮市(1968)：『新編一宮市史 資料編13』541～695頁。
- 31) 前掲27)。同史料の三河国幡豆郡の項には、「早魃ナレバ収入ハ用水ヲ灌漑ニ力ヲ尽スト尽サザルニ因リテ大ニ差アリ、反別耆反歩ニ付六貫目位ヨリ七十貫目位ニ至ル」とあり、早魃年には灌漑用水管理の差が収入に大きく影響することを述べている。
- 32) 「農工物産表」、佐織町史編さん委員会・佐織町史調査編集委員会(1987)：『佐織町史 資料編2』、佐織町役場、535～560頁。
- 33) 「明治23年中島郡下津村農事調査」、新修稻沢市史編纂会事務局(1989)：『稻沢市史 資料編16 近現代3』220～226頁。しかし綿の反当収益1円88銭から地租・地方税などの経費2円3銭余を差し引くと、逆に15銭の損となる。
- 34) 「明治14～18年中島郡農事年報」、前掲33)、202～226頁。
- 35) 「天明四年尾張藩村方御触書集」、一宮市(1957)：『新編一宮市史 資料編7』307頁。
- 36) 前掲7)、第8巻、243頁。
- 37) 前掲4)、林(1956)。
- 38) 尾西市史編纂委員会(1988)：『尾西市史 資料編3』252頁。
- 39) 前掲4)、林(1956)。
- 40) 前掲25)。これによれば、綿作反収が中等以下の層にあっては、綿作の所要労働力は女子が男子を上回っており、女子労働力は反収が増加してもあまり増加していない。
- 41) 一宮市(1971)：『新編一宮市史 資料編10』510～512頁。
- 42) 一宮市(1968)：『新編一宮市史 資料編8』356頁。
- 43) 前掲4)、林(1956)。
- 44) 丹羽 弘(1967)：近世後期における農村工業の展開過程——美濃綿生産地帯の場合——、岐阜経済大学論集1—1、57～112頁。
- 45) 一宮市(1977)：『新編一宮市史 本文編 上』918～920頁。その他19世紀初期から19世紀半ばにかけて、綿作率が低下した村々としては、
中島郡増田村(1800年43.2%→1868年1.1%)、
中島郡平野村(1824年21.4%→1870年10.9%)
がある。
- 46) 「慶応2年貧民木綿産業世話方被仰付一件」、半田市誌編さん委員会(1969)：『半田市誌 史料編II』、半田市、345～351頁。前掲4)、林(1965)によれば、この当時の綿の不況・高騰＝原料の払底は、綿替制(他領から綿を買い入れ、これを農家に貸与して製織させ、木綿世話人の手で他所売りする制度)＝商人買い占め資本による生産面への支配の強化につながったとされる。
- 47) 実綿・繰綿の他所売り禁止は天保8年8月の触状において出された(前掲42)、98頁)。きっかけは天保7年の綿不作によるものであったが天保8年10月に繰綿の他所送りは許可されたが、実綿の他所売り禁止はその後も継続された。
- 48) 岡本幸雄(1955)：徳川中期における尾張一農村の考察——葉栗郡里小牧村の農業構造——、立命館経済学4—5、92～119頁。
- 49) 前掲45)、920頁。
- 50) 古島敏雄・永原慶二(1954)：『商品生産と寄生地主制』東京大学出版会、300頁。
- 51) 塩沢君夫・川浦康次(1956)：ブルジョアの発展と地域的市場圏の成立(試論)——尾張藩岩倉市を中心として——、調査と資料(名古屋大学経済学部経済調査室)、1～58頁。
- 52) 林 英夫(1958)：尾濃綿織物地帯における商品流通の展開、歴史学研究219、11～19頁。
- 53) 大山喬平(1978)：『日本中世農村史の研究』岩波書店、320～364頁。
- 54) 青木伸好(1978)：尾西の織物、樋口節夫・浮田典良編『生きている近世3 伝統産業』淡交社、77～84頁。
- 55) 「六軒問屋併西浦肝煎及嘆願書」、半田市史編さん委員会(1969)：『半田市誌史料編II』、351～357頁。

頁。

56) 愛知県実業教育振興会(1941):『愛知県特殊産業の由来(上)』461~472頁。

[付記]

本稿は1992年度日本地理学会春季学術大会(1992年4月1日, 中央大学理工学部)において発表した内容に加筆修正を行なったものである。なお調査にお

いて一宮博物館の毛受英彦氏には, 資料閲覧に際し御便宜を図っていただいた。また英文要旨については, 朋友 Bob Kololischuk 氏に校閲いただいた。これらの方々に記して感謝申し上げる。最後に筆者が本学着任以来, 公私にわたりお世話になった愛知教育大学名誉教授松井貞雄先生(1993年10月23日逝去)の御霊前に本稿を献呈申し上げる。

THE REGIONAL CHARACTER OF COTTON CULTIVATION IN OWARI DURING THE LATE EDO PERIOD

Kimiya IWASAKI

Owari country, the former western part of Aichi Prefecture, formed an important area with respect to cotton production in the central part of Japan along with adjoining country Mikawa. This study of cotton production in Owari during the nineteenth century makes clear the following aspects: the major production area and its geographical background, the productivity, the change of cotton cultivated area, and the regional differences in the cotton textile.

It is considered that the major cotton production area was the western portion of Owari, especially Nakashima county. In the Owari alluvial plain, Nakashima county is where the natural levee is the most prevailing. The author, in this analysis, used the cotton cultivation rate by each village which is the rate of the area under cotton cultivation for total dry field area. In Owari, under crop rotation, cotton was planted in a dry field as a summer crop with barley grown as a winter crop. Taking into consideration that a paddy field was too marshy for cotton cultivation, cotton was not planted in the paddy field of Owari. Next, the author investigated a document, called "*Denmencho*", for calculating the cotton cultivation rate in which the areas of various planted crops were recorded. There were some villages in Nakashima county which had very high rate of cultivation exceeding sixty percent. These rates were identical to the rates in the Kinai district where the largest cotton cultivation area in contemporary Japan was located.

Upon calculating the average area under cotton cultivation per farmer, the author's results indicated more than one tan (≒ten are) per farmer. Land productivity for cotton cultivation as a whole was average, but its productivity varied greatly with each individual farmer. The area under cotton cultivation changed with time and place. The author presumes that the level of cotton production was reduced in villages as the textile industry quickly spread. This may have occurred because of the conversion of labour from cotton cultivation to the textile industry. Conversely, in villages where the textile industry did not expand as much, cotton production was kept within a certain and constant rate. The mutual relationship, between the price of cotton and the price of manure like dried sardine and oil cake, was

examined. Both prices had roughly changed in parallel until the end of the Edo period, but after that the price of cotton became constant compared with the increase of the price of manure, and as a result it became gradually disadvantageous to produce cotton.

After 1844, in Owari, textile products were monopolized by the feudal government together with other commodities produced, but this monopoly system in the domain of Owari could not obtain excellent results. The advancement of the cotton industry resulted in many kinds of textile commodities from the Owari district. These commodities were broadly divided into two types : the striped cotton fabrics mainly produced in the western part of Owari and the bleached cotton fabrics from the southern part of Owari.